日本経済新聞 記事利用について

球都桐生プロジェクト　野球＋テクノロジーで人材育成 編集委員　北川和徳

2024/10/2 5:00 | 日本経済新聞　電子版

「球都」と呼ばれる群馬県桐生市。2023年8月の東京六大学オールスターゲームには約5000人が集まった

群馬県桐生市が野球を前面に出した町おこしを進めている。昭和の時代から「球都桐生」と呼ばれた人口約10万人の地方都市。野球の試合や関連イベントなどで地域を活気づけるとともに、最新のテクノロジーを導入した野球ラボを開設し、子どもたちの能力を引き出す新しい指導にも取り組んでいる。

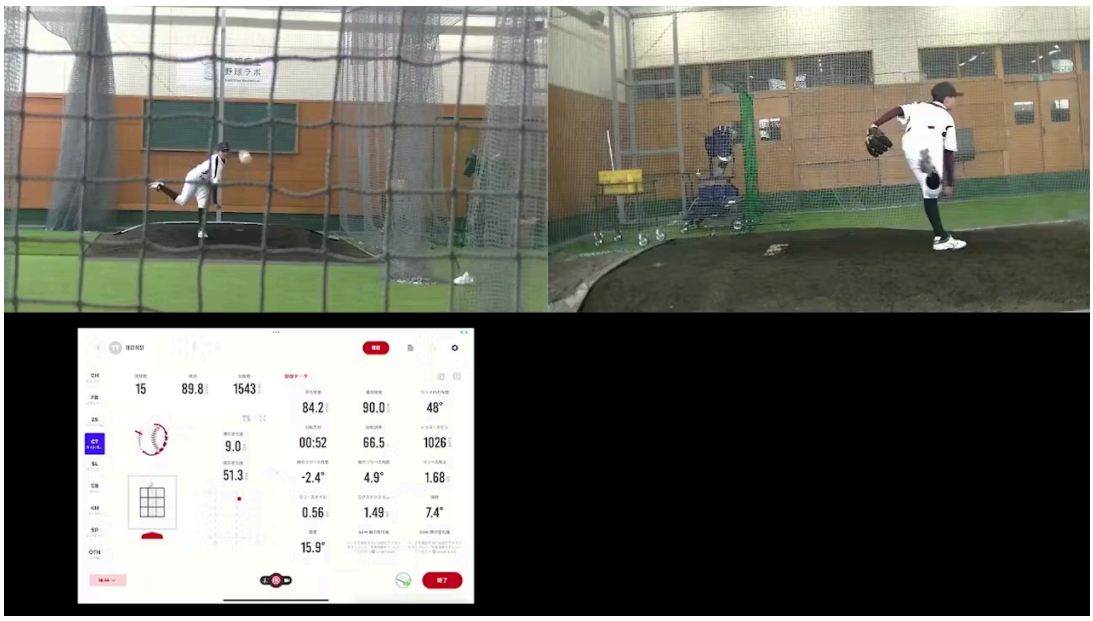
桐生市は2年前に9月10日を「球都桐生の日」に制定した。官民連携の「球都桐生プロジェクト」はさまざまな事業を展開している。東京六大学のオールスター戦や日本代表監督としてワールド・ベースボール・クラシック（WBC）を制覇した栗山英樹氏の講演会などを開催。東武鉄道の新桐生駅を野球場仕様にデザイン変更するプランも進んでいる。

昨年9月にはWBCで日本代表を率いて優勝した栗山英樹氏の講演も行われた

ただ地域の特色を生かしてのブランドカアップや交流人口拡大を狙ったイベントや企画は珍しくない。個人的に注目しているのがテクノロジーを活用した子どもたちへのアプローチ。24年3月、学校統合で閉校となった桐生南高校の跡地に小、中、高校生をターゲットに野球ラボを開設した。

体組成や跳躍力などフィジカル能力の測定はもちろん、弾道測定機「ラプソード」やバットスイングを解析する「ブラスト」などプロチームや選手が使うような機器を導入。投球したボールの速度や軌道、回転数、回転方向、バットスイングの速さ、バットの角度などがすぐ分かる。

ラボは中学生の硬式野球チーム「桐生南ポニー」を立ち上げた一般社団法人「桐生南スポーツアカデミー」が市の委託で運営する。桐生南ポニーなど市内で活動する小、中、高校生は市の助成で測定は無料。データはアスリートの情報管理システム「ワンタップスポーツ」に蓄積し、それぞれのトレーニングによる変化、成長の経緯を数値や映像データで確認できる。



投球の速度や軌道、ボールの回転数、角度などがすぐに画像とともに表示される（一般社団法人桐生南スポーツアカデミー提供）

子どものころからテクノロジーを駆使してどんな選手が育つのか。そこが注目されそうだが、本当の目的はその先にある。桐生南ポニーの謝敷正吾監督は「データが分かることで、子どもたちが興味を持って考えてトレーニングをするようになった」と話す。

スピードがなくても打ちにくい球とは。ホームランは打てなくてもヒットにするにはどうバットを振ればいいのか。そんなことをデータは考えさせてくれる。桐生南スポーツアカデミーの荒木重雄代表は「そうやって考えて野球と向き合って成長した子どもたちが、野球に限らずどんな大人に育つのかが楽しみです」。球都桐生が野球＋テクノロジーで優秀な人材を輩出する未来を思い描いている。

【関連記事】

・群馬の新桐生駅を野球場風に　桐生市が「球都」をPR

・群馬・桐生市「球都桐生の日」にユニバーサル野球大会

「日経電子版 スポーツ」のX(旧Twitter)アカウントをチェック

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.